

ハレのごちそうともの憂い祭りの日

里草会顧問 福井正樹

日本の各地にさまざまな祭りがある。京都にも大阪にも三大祭りがある。岸和田や博多のように勇壮で荒々しい祭りに対して、高山や長浜のように豪華で技巧の極致のような山車が練り歩くもの、高知や徳島は人がにぎやかに舞い踊る。東北は盆の鎮魂の流れもあってそれぞれ特徴のある様式に発展している。札幌の雪まつりや秋田などのかまくら（雪洞）など、各地で一年中特色のある祭りが繰り広げられている。

私が今住んでいる名張市の旧市街地は、伊勢参道の宿場町で湾曲した川に囲まれている。私が住み始めてから名張市は3倍以上に人口膨張したが、旧市街地は川に囲まれているので、同心円状に広がらなかった。周辺に数千戸の独立した団地がいくつもできて、市役所や警察署や消防署などの公共機関は大きくなった市の機能を果たすために、新しい場所に移った。昔ながらの古い街には新しい人は入り込まないで、古い伝統と人間関係が維持されている。

この旧市街地には10いくつもの小さな町があり、ほとんどの町に特徴のある祭りがあって旧市街地を中心に繰り広げられる。2月の最も寒い時にハマグリの市が開かれ昔は山のものとお海のものをお交換したのだという。この時運び込まれた植木などは、数日間は展示販売している。七夕をまつる東町では切った青竹に水羊羹を入れて固めたものを大量に売り出して配る。丸の内の神社の神輿は新町の旅所に行って一晩泊まり、翌日も練りながら戻ってくる。七福神が街中を巡回する町もある。その祭りの日は普段はひっそりと忘れられているような社務所などが掃き清められて、急に人出が多くなって今日はこの町の祭りなんだと気づかされる。

冠婚葬祭も旧市街のしきたりでは派手で負担が大きいので自粛の話が商工会議所などでできるが、この消費が街の小さなさまざまな店の売上げにつながっているのだという。そして祭りもお互いに呼び合い招きあう、親戚知人の交歓の場なのだ。リオのカーニバルのように、一年の蓄積のすべてをかけて祭りに費やす。マスコミのニュースで毎年取り上げられるような祭りは、その土地と季節の象徴でもあり、かかわりのある人たちにはそれぞれの思い入れがあるだろう。

それと比べると子供の頃の山里の祭りはささやかなものであった。でも相当早くから招かれる客も決まり、家ごとの心づもりもしてその準備や段取りがうわさになる。結婚したり子供が生まれたりしたうちは、遠くからの親戚も村の中の縁者もこの機会に招かれる。

麦や菜種を作っていた二毛作の頃は、田植えがいまよりひと月以上おそく稲の収穫は10月半ばからだ。稲が黄金色に色づき秋の収穫のめどがついて心も豊かになり、田植えからここまでの苦労の積み重ねを取り入れる時だ。祭りのごちそうの一つはクリやアズキの入ったおこわが食べられる。客を呼んでいる家は、マツタケなどの山の幸だけでなく、気まぐれに村を廻ってくる行商人などにこの時ばかりは海の魚や練り物なども予約する。

私は祭りのおこわのために朝早く山裾のあちこちのクリの木を廻って、落ちていたクリを集めた。拾ったクリは水を入れたバケツなどに沈めてためておく。人より早く回らないと、誰かが拾ってゆくし、人に知られていないクリの木も自分のものにしておきたい。このころにはカキやサツマイモも収穫できるようになる。吊るし柿にする大きな柿（美濃柿と呼んでいた）は、熟して赤くなったものは他人の所有木でも、見つけたものが採って食べても良かった。クリも栽培している屋敷のものは採れないが、山にあるものは見つけたものが拾ってよかった。

祭りの一週間くらい前に、鎮守の参道と鳥井の下に二本ずつ若宮神社と墨で染めた大きな白い幟が立つ。黄色の稲田に浮かぶ鎮守の森は、これだけで急に引き立つ。さらに祭りの数日前から公会堂に太鼓が据えられて、誰でも叩いてよいようになる。独特なリズムがあって、熟練しないと連続して叩けないが、通りかかった若者などは自慢げに上手に叩く。その力強さと持続時間と技巧が子供にはマネができないので、熟練した青年の自慢だ。年に一回しかない自由に叩くことのできるこの機会に、相当叩かないと上手な音の強弱やリズムが会得できない。

そして各家の門口に屋号などを書いた大きな高張提灯が設置され、前日の夜には明かりがともされる。祭りの前日は夜宮（宵宮）で鎮守の森で一晩中大きな焚火をし、お堂もあけられて戸主などが籠ることになっている。そして村中のだれもが神社にお参りする。子供たちは焚火の明かりで走り回り、なんとなく騒がしい雰囲気が醸し出される。

府県境の尾根に広がる山の裾にへばりついた集落にとって、祭りの高揚はささやかなものだがハレの日としては十分だった。緑に囲まれた鎮守の森に幟が翻り、太鼓の音が気まぐれに秋風に乗って流れてくる。夕暮れには普段は雨戸を閉めて、漏れる明かりも人どうりもなかった家々の軒に、明かりがともされ障子もあけられる。久しぶりに帰ってきた人も昔馴染みを訪ねて縁側で近況を語り合い、その輪に通りがかりの知人も加わり、別の所からも誘いがかかる。

そして招かれた客も一度は神社に参るし、手のすいたものはだれかれとなく神社にたむろして大きな焚火を囲み火の粉を巻き上げる。子供たちも歓声をあげて駆け回っている。美味しいご飯も普段の粗食と違うおかずも腹いっぱい食べられる。小学校の校区は祭りの日が同じで、対面する県道を挟んだ向こうの村の鎮守でも同じように火を焚いて火の粉を高く巻き上げている。そして時には太鼓の音や歓声も流れてくる。

祭りの晩は野荒らしも大目に見てくれるとか言って、年上のガキ大将は隣の村のサツマイモ畑に忍び込んでサツマイモを盗みたき火で焼く。時間を忘れて騒ぎまわっているようでも、秋の夜は長い。まして徹夜などしたことのない子供にとっては、はしゃぎまわった後にはなぜだか満ち足りた疲れが押し寄せてきて、お堂の隅の方で寝転がってしまう。ふと気づいたものが起き出して、たき火を掻き起こすが、そのもの憂さの中で祭りの朝が来るのだった。

腹いっぱいごちそうを食べて、寝不足のもの憂い体を持って余すのが祭りの一日であった。